

高 橋 遺 跡

——宅地造成工事に伴う発掘調査報告書——

2012.3

須坂市教育委員会

高 橋 遺 跡

—宅地造成工事に伴う発掘調査報告書—

須坂市教育委員会

序

文化財は、地域の文化・歴史を残し伝えていくものとして重要な役割を持っています。時代が川まぐるしく移り変わる現在においてもその役割は変わらず、むしろ、より重要となってきているものと思われます。

この文化財の中で、「埋蔵文化財」は地中にあることから、開発などにより失われる場合があります。このような場合、埋蔵文化財に対して、遺跡を記録として後世に残すことを目的とした発掘調査を行っています。

今回の発掘調査を行いました高橋遺跡は、宅地造成工事に伴い行われたものです。調査によって、古代の造構と遺物が出土し、地域の歴史の一端を確認することができました。

本書は、発掘調査により地域の中にある埋蔵文化財を記録として残し、さらには地域の歴史的財産として共有することを目的として、発掘調査の結果をまとめたものです。今後、報告書が地域文化を考えるうえでの一助となり、各方面でご活用いただければ幸いに存じます。

末筆ながら、埋蔵文化財へのご理解とご協力をいただきました関係各位に感謝を申し上げます。

平成24年3月

須坂市教育委員会
教育長 渡邊 宣裕

例　言

- 1 本書は、須坂市大字日滝1175-1他に所在する高橋遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は宅地造成工事に伴い、須坂市教育委員会が主体となり須坂市市民共創部生涯学習スポーツ課（以下生涯学習スポーツ課）に依頼して行った。
- 3 山土造物および調査に係る諸資料は生涯学習スポーツ課で保管している。
- 4 遺跡略号は「TAK」と表記する。
- 5 本書に掲載した遺物番号は通し番号とし、本文・遺物観察表・図版・写真においてすべて一致している。
- 6 遺構図のスクリーントーンは が焼土、 が炭化物を示す。遺物実測図は須恵器の断面は黒塗りである。
- 7 1/25,000地形図は国土地理院の承認および助言を得て同院所管の測量成果を使用して得たものである。
- 8 引用文献は著者および発行（西暦）を文中に〔 〕で記し、巻末に一括して記載した。
- 9 遺構トレース、遺物実測・トレースは遠藤恵美子・田中一穂、遺物写真撮影は中村祐誠が行った。
- 10 土器の色調等は、農林水産技術会議事務所監修『新版 標準土色帖』(1967) を用いた。
- 11 I・II章－千葉剛成・遠藤恵美子、III・IV章－田中一穂が執筆し、田中一穂が編集した。

目 次

序

例言

第Ⅰ章 調査の経過	1
1 調査に至る経過	1
2 調査日誌	1
3 調査体制	2
第Ⅱ章 遺跡周辺の環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
第Ⅲ章 調 査	5
1 調査区概要	5
2 遺構と遺物	8
第Ⅳ章 結 論	12

写真

抄録

挿 図・挿 表 目 次

図 1 作業風景	図 9 SB1 出土遺物
図 2 周辺遺跡分布図	図10 SB3 遺構図
図 3 調査位置図	図11 SB3 出土遺物
図 4 基本土層性状図	図12 SB5 遺構図
図 5 試掘調査出土遺物図	図13 SB5 出土遺物
図 6 試掘調査出土遺物	図14 SX1 出土遺物
図 7 遺構全体図	図15 B 区遺構配置図
図 8 SB1 遺構図	表 1 遺物観察表

写 真 目 次

図版 1 遺構個別写真(1)
図版 2 遺構個別写真(2)・遺物写真(1)
図版 3 遺物写真(2)

第Ⅰ章 調査の経過

1 調査に至る経過

須坂市大字日滝1175-1他において宅地造成工事が行われることとなり、平成22年5月27日に須坂市まちづくり推進部道路河川課より都市計画法第32条に基づく開発事業計画に対する意見の照会があった。当該工事予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「高橋遺跡」に該当していたため、同月28日付で協議を必要とする旨、意見書を送付した。

5月31日付で事業者である株式会社サンワシステムより「土木工事のための埋蔵文化財発掘の届出」の提出があり、発掘調査が必要との意見を付して6月14日付で「土木工事のための埋蔵文化財発掘の意見書」を長野県教育委員会あてに提出した。

6月17日に現地にて事業者との二者協議を行い、翌18日から21にかけて試掘調査を実施したところ遺構および遺物を確認した。これを受けて7月1日に長野県教育委員会文化財・生涯学習課埋蔵文化財係と、株式会社サンワシステム、生涯学習スポーツ課の各担当者での三者協議を行い、発掘調査期間、費用負担等を確認するとともに、最大限の遺構保存を事業者に求めた。

7月9日、二者協議の結果、宅地部分は造成地全体の盛土厚の増変更により遺跡の保護を図る方向とし、道路部分及び土留め擁壁・宅地境界の一部を先行して発掘調査することとした。

発掘調査は、7月28日より開始。8月11日に現場作業を終了し、調査日数は10日間であった。調査後、平成22年度に出土遺物、遺構図面・写真等の整理作業を、平成23年度に報告書作成作業を行い刊行に至る。

なお、宅地造成部分については、9月15日付で設計変更後の設計書を添付した「土木工事のための埋蔵文化財発掘の届出」の提出があった。また11月9日付で、事業者と須坂市教育委員会教育長との間で、宅地建設等に係る土木工事の掘削深度は、原則として造成後の地盤から50cm以内とし、このことを宅地販売時の重要事項説明書に記載する旨の覚書を交わした。これにより宅地部分については遺跡の保護が図られることとなった。

2 調査日誌

- 7月28日（水） 重機による表土掘削。調査区ほぼ全面を終了。
7月30日（金） 調査区全体に測量用杭打設。
8月2日（月） SB1～4 遺構検出。
8月3日（火） 遺構掘削、開始。
8月4日（水） SB1全体写真撮影。
8月5日（金） C区土坑群図面作成。
8月7日（土） 調査区全体平板測量。SB4写真。SB
3・5全体図作成。
8月9日（月） SB5・SX1図面作成
8月10日（火） SB2・3・5・SX1写真撮影。
8月11日（水） 撤収作業。現場終了。



図1 作業風景

3 調査体制

調査主体 須坂市教育委員会

渡邊宣裕（教育長）

春原博（教育次長）

調査組織 須坂市 市民共創部 生涯学習スポーツ課 文化財係

管 理 黒岩紀志雄（部長）

統 括 吉田孝（課長）

庶 務 小林宇亮（課長補佐～H22） 滝沢健一（課長補佐 H23）

丸山裕範（課長補佐兼文化財係長）

市川裕子（学芸員～H22） 山下佳代子（事務員 H23）

関 郁子（事務員 H22） 関久仁子（事務員 H23）

調査支援 千葉剛成（須坂市立博物館 学芸員～H22・文化財係 主査 H23）

調査担当 小林伸子（学芸員～H22）（発掘調査）

遠藤恵実子（学芸員 H23）（整理作業）

調査職員 片野ゆうみ（学芸員 H22） 田中一徳（学芸員 H23）

中村拓誠（学芸員 H23）

調査参加者 荒川美和 石原崇 北村英生 清水希一郎 岩原里子 永井明美 古野祐子 村石剛

徳永陸雄（社）須高広域シルバー人材センター）

発掘調査の実施に際して、調査地土地所有者、隣接地の方々及び高橋町区のみなさまには、埋蔵文化財保護に対するご理解を頂き、ご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

1 地理的環境

須坂市は、長野県の北東部に位置している。市域の西半は長野盆地の北東部、東半は群馬県に接する第四紀の四阿山、浦倉山、土鍋山、御飯岳など標高2000mを越える河東山地が占める。市域西縁部は千曲川が北流し、その支流である百々川・鮎川と松川・八木沢川が河東山地から西流して注ぐ。千曲川に沿って自然堤防が形成され、その背後には沖積地が広がる。市街地の大半は百々川・松川下流域に形成された複合扇状地上に位置し、古くから居住域・農耕地として利用してきた。さらに山地に近づくにつれ小規模な河岸段丘や台地、急勾配の堆積地形である冲積堆が所々に分布する。

高橋遺跡は松川と八木沢川により形成された扇状地の南辺に位置する。南方約120mに扇状地の南辺を画する八木沢川が流れる。

2 歴史的環境

須坂市内において人の活動のあとが確認されるのは旧石器時代からである。山間地である仁礼地区にある宇原遺跡からは、遺構の確認はないが、尖頭器1点が出土している。また、縄文時代への過渡期に相当する頃の神子



1 高橋遺跡 2 宮原遺跡 3 橋場遺跡 4 本郷大塚古墳 5 行人塚古墳 6 小河原遺跡群 7 高畠遺跡 8 塩川・須板・
 小山遺跡群 9 須板園芸高校校庭遺跡 10 金井原遺跡 11 米持遺跡群 12 井上・幸高遺跡群 13 天神古墳群 14 野辺天
 神古墳群 15 塚の越古墳群 16 天塚古墳群 17 鐘塚古墳群 18 南原遺跡 19 坂田遺跡 20 天徳寺遺跡 21 駆竜山古墳群
 22 大星古墳群 23 扇ノ入古墳群

<凡例> ○ = 遺跡・遺跡群 ● = 古墳

図2 周辺遺跡分布図 (S=35,000)

柴型石斧が、松川扇状地の扇尖部にあたる小河原地籍で単独で発見されている。

縄文時代では、草創期から前期にかけての遺跡のほとんどが百々川扇状地の上流域である仁礼地区を中心とした山地に分布し、特に草創期の微隆起線文土器が石小屋削穴遺跡から出土するなど、岩陰遺跡や洞窟遺跡の存在が特徴的である。中期になると、扇側部を中心とした平野部での遺跡数が増大し、百々川扇状地に立地する三入道遺跡では、配石状遺構などと共に中期後葉から後期前葉の土器・打製石斧が出土している。また、松川扇状地に立地する構場遺跡では、中期の土器や石器が多く出土しており、当期の集落がやや広範に造られていたことがみられる。しかし後期後半になると遺跡数は激減する。

弥生時代では、扇端部に位置する中期・栗林式土器を出土した須坂園芸高校校庭遺跡があるが、市内で確認されている遺跡のほとんどは、後期（箱清水式土器）が主体である。これらの遺跡の分布状況を概観すると、まず、扇側部や山麓の低湿地を背景とした高橋遺跡や南原遺跡、天德寺遺跡など比較的小規模な遺跡の一群がある。次に、扇状地末端に立地し、前面に大きく広がる千曲川による後背湿地と扇端部の湧水に恵まれた、小河原遺跡群、塙川・須坂・小山遺跡群（須坂園芸高校校庭遺跡等を包括）、米持遺跡群、井上・幸高遺跡群があり、最も遺跡の集中する箇所である。さらに、千曲川の自然堤防上に立地する八重森遺跡や東畠遺跡などがあるが、その詳細は明らかでなく、分布密度も低い。

古墳時代では、前期後半の4世紀末に築造された、積石塚である八丁鎧塚1号墳をはじめとして、確認することができるものとして市域内に約100基の古墳が築造されている。5世紀中頃と推定される家形埴輪や椅子形埴輪を伴った天神1号墳や、5世紀後半で銅鏡銀製獣面文鈔板が出土し、張出をもつた積石塚の八丁鎧塚2号墳である中期古墳もあるが、その多くは小規模な後期古墳で、十石混合を中心とした積石塚が主体である。百々川扇状地の鶴川流域の段丘沿いに分布が最も集中している。

松川扇状地の扇尖部から扇側部にかけての八木沢川沿いには口瀧原古墳群があり、7世紀初頭の象嵌や主頭をはじめとした多くの太刀や多量の実用的な馬具を出土した本郷大塚古墳などがある。同じく松川扇状地の松川沿いの扇側部には松川古墳群があり、小布施町の雁田山麓に展開する小規模古墳群と対応している。この他に、坂田古墳群など尾根上または山腹部に造られている一群などがあるが、消滅した古墳は少なくなく、現存する古墳の分布状況は、築造時の様相とは大きく異なる。

当時の集落遺跡は、前述の弥生時代後期以降の分布状況と基本的に大きく変わることはないが、扇端部の遺跡は著しい拡大を遂げ大集落を形成する。これは、豊富な湧水と、前面に大きく広がる千曲川による後背湿地を背景に、新たな技術の導入により大規模な水田開発が行われはじめたことによろう。なお、これら集落域と古墳の分布はほとんど重なることは無く、墓域との区別が存在していた。

奈良・平安時代は、扇状地末端部の大集落を中心とした遺跡分布で、古墳時代とはほぼ同様な様相を呈している。この中で、高橋遺跡は松川扇状地の扇尖部、八木沢川の右岸に位置している。同じく松川扇状地に位置する、扇端部に展開する小河原遺跡群などに大規模集落にはなりえなかったが、縄文時代以来、比較的小規模ながら日々と人々の暮らしが育まってきた地である。付近には同様に、縄文時代前・後期、弥生後期、平安時代の各遺物が出土している構場遺跡などがある。遺跡は八木沢川による低い段丘上に立地し、水の確保が容易であり、弥生時代以降は、八木沢川沿いの狭い低地が生産の基盤であったのであろう。

第三章 調査

1 調査概要

調査対象地は宅地造成地内の道路部分だが、試掘トレンチを掘削して(図7)本調査範囲を確定し(図3)、幅約5m、長さ65mのクランク状の範囲を調査区A区として設定した。このほかに宅地境界の一部について擁壁工事に伴い掘削が行われるため、造成地の北端と東端付近にも調査区を設定し、北をB区、東をC区とした。各調査区の面積はA区約680m²、B区約39m²、C区約14m²で総面積は約733m²である。

本調査中の基本土層に関する記録が見られないため、本報告では、平成23年4月に遺跡内において行った住宅建築に伴う試掘調査の土層観察に従っておきたい。基本土層は以下の通りである(図4)。

- I層 造成盛土
- II層 旧耕作土
- III層 暗黄褐色土(黄褐色細砂・小礫混じり)
- IV層 黒褐色土(遺物包含層)
- V層 濃暗褐色土(礫石多く混じり)
- VI層 黄褐色疊層(地山・造構確認面)

現地表面からIV層(遺物包含層)までは約50~80cmの深さである。断面観察ではIV層とV層の相違を看取できるが、平面では判別しがたいため、VI層(地山)上面まで掘削して造構確認面とした。



図3 調査位置図

検出遺構は、堅穴住居跡3軒、性格不明遺構1基、ピット・土坑9基などである。遺構の切合ではなく、各遺構は散在する。遺構を確実に把握するため、確認面が下がり、遺構の掘り込みは全体的に浅い傾向にある。

遺物は土器類煮炊具が多く、その他須恵器・土師器杯、須恵器貯蔵具などが出土した。なかでもSB3出土の把手付小甕は県内に類例が少ないものである。なお八木沢川による洪水層とみられるⅢ層によって、遺跡が厚く被覆されたためか後世の擾乱を免れ、中近世以降の遺物の混入はほとんどなかったとみられる。

出土した土器については、器種分類や時期について、屋代遺跡群の編年【鳥羽英継2000】に従って記述する。

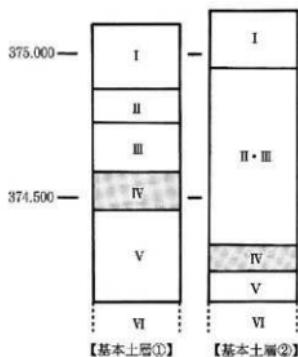


図4 基本土層柱状図

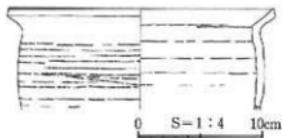


図5 試掘調査出土遺物図

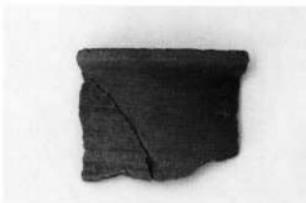


図6 試掘調査出土遺物

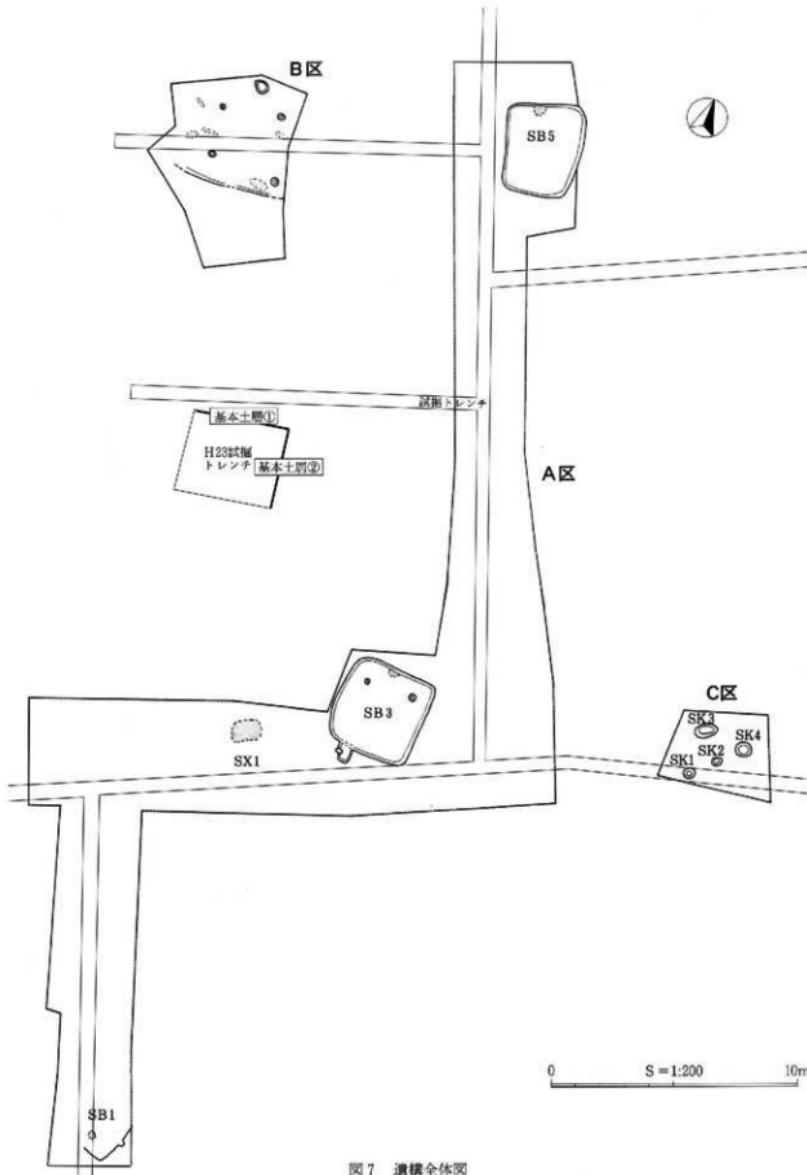


図7 遺構全体図

2 遺構と遺物

SB1 (1号住居)

A区の南端に位置する。竪穴住居の東壁と南壁の2辺のみが検出され、東壁は一部調査区外に伸延しているため全容が不明である。検出した長辺(東壁)は約2.0m、短辺(南壁)は約0.8mで方形を呈すると思われる。主軸方向は東南一北西である。この住居跡と切り合い関係にある遺構はない。遺構検出レベルが低いため、残った遺構の深度は約16cmである。よって覆土の堆積状況なども明らかにできなかった。貼床は検出されず、主柱穴や貯蔵穴など床面を掘り込む遺構も検出されなかった。この住居跡の西南隅に約32×24cmの範囲で炭化物の集中域が検出された。

住居の東壁中央付近では約15~35cmの躰石が集中して出土した。躰石の材質などは不明であるが、円錐が多く川原石の転用と推測される。躰石の下には焼土とみられる赤褐色土が部分的に検出された。また東壁中央に煙道状のプランも検出され、カマドが構築された可能性が推察される。出土した躰石はカマドの構築材として使用された可能性が高い。

遺物は総重量1,758gで、土師器裏片が多く、須恵器は杯片のみ出土した。この中でカマドから出土した遺物2点を掲載した。1は土師器裏I(砲弾型)に当たり、外面にケズリ調整を施すAタイプである。口縁の開きが少ないとから、古代5・6期に該当する。2は約6cmの四角柱を呈した軽石で、全面を磨いており、被熱している。砥石として利用された可能性がある。

遺構の所属時期は遺物の年代から、8世紀末~9世紀前半と考えられる。

SB3 (3号住居)

A区中央部に位置する。北半が調査区外に及んでいたため、調査区を拡張し完掘した。長辺約4.0m、短辺約3.8mではほぼ正方形を呈する。主軸方向はほぼ真北を示す。SB1と同様に、遺構検出面が低いため、深度は最大で約10cmである。南壁の一部は後世の擾乱により削平されている。床面は地山面であり、貼床はみられない。ビットが3基検出され、北西隅のビットは径16cm、深さ20cm、北東隅のビットは径24cm、深さ15cm、南東隅のものは径20cm、深さ15cmである。いずれも覆土の堆積状況に関する所見がなく詳細は不明であるが、検出位置から柱穴の可能性が高い。ビットから遺物は出土していない。

カマドは北壁中央部に痕跡が確認された。壁際には焼土範囲が長径約40cm、短径約32cmの楕円形で検出され、赤褐色を呈する。煙道の有無やカマドの詳細な土層堆積状況は明らかでない。カマド周辺には躰石が数点出土し、

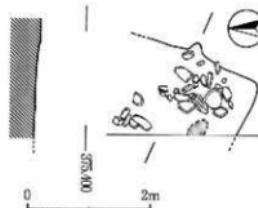


図8 SB1 遺構図

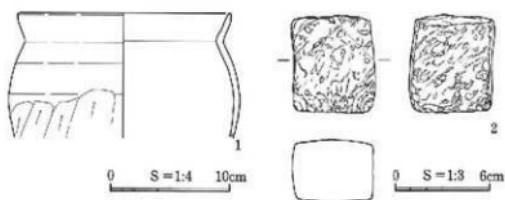


図9 SB1 出土遺物

袖石の一部と天井石と推測される石がみられる。検出した礫石にはカマド部材が混在していた可能性が高い。この他に、住居の西側を中心に約10~30cmの礫石が集中して検出され、いずれも床面直上に位置している。

遺物は総重量5,252g出土し、本調査では最多の出土量である。SB1と同様に須恵器片が少なく、土師器煮炊具が大半である。黒色土器もほとんど含まない。カマドからは3~5が出土した。3は須恵器杯Aで底部ヘラ切後末調整で器高が低い。4はナデ調整を行う甕A~Cで、輪積み痕を明瞭に残す。5は小甕であるが、1単位の把手が貼付されている。類例は北信では屋代遺跡群（上信道報告）のSD7035-①から出土しており、古代1~2期とされている。6~8は覆土から出土し、6は砲弾型で口唇部を摘み上げる甕I~Bで、古代4~6期に属する。8は胴部下半~底部のみの遺物であるが、器形から甕Eとみられる。底部が小さい平底であることと、立ち上がりが比較的急であることから、古代2~3期のものとみられる。7はハケ甕である甕B

であるが、底部のみの資料であるため、タイプや時期は不明である。

カマドから出土した3~5や覆土出土の8は、概ね7世紀末~8世紀前半に比定され、住居の年代を示す。一方覆土から出土した遺物は6にみられるように8世紀後半~9世紀前半に属するとみられ、時期が新しく住居廃絶後に混入したものと推定される。

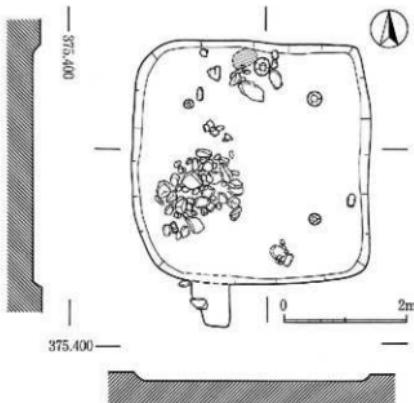


図10 SB3遺構図

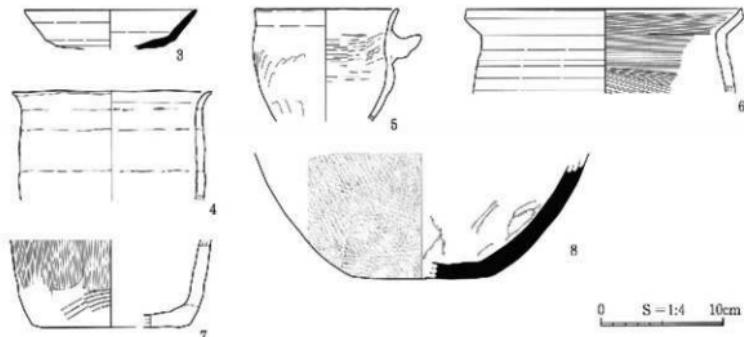


図11 SB3出土遺物

SB5（5号住居）

A区の北端東壁際に位置する。長辺約4.1m、短辺約3.4mで、南辺が狭い全体に歪んだ長方形を呈する。主軸方向はほぼ真北である。他の住居跡と同様に検出面が低いため、深度は最大で約12cmで浅い。壁面の立上がりは不明である。貼床はみられず、床は礫層にまで達している。主柱穴などは検出されなかった。

北壁周辺には礫石が集中し、その中に土器が散在した状況が確認された。北壁中央の礫石の下面には長径約24cm、短径約16cmの楕円形で赤褐色の焼土範囲が確認され、カマドがこの北壁中央部に位置していたとみられる。多く出土した礫石は、その一部がカマド部材として使用された可能性がある。なお、煙道の有無や詳細な土層堆積状況は不明である。

遺物は、総重量1,487gで、出土量は少ない。土師器煮炊具が多く、須恵器の杯片が少量みられる。遺物の多くは覆土出土であり、掲載遺物では15の土師器小甕が床面直上の出土である。9・10は須恵器杯Aで底部調整は回転糸切である。内面底径などから、古代5～6期に比定される。11～13はいずれも甕I～Bであり、古代4～6期に属する。14・15はロクロ調整であることから小甕Dに分類され、古代4～10期に比定される。遺物の所属時期からは住居跡の年代は8世紀後半～9世紀前半と考えられる。

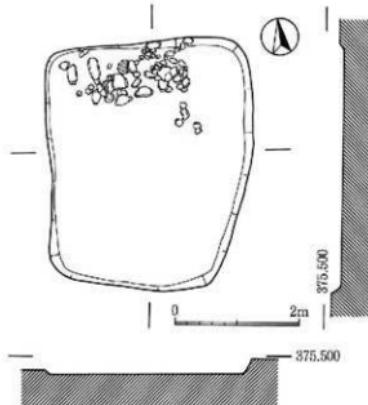


図12 SB5遺構図

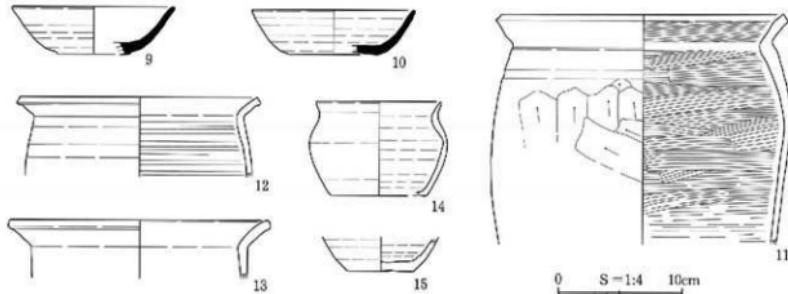


図13 SB5出土遺物

SX1 (性格不明遺構)

SB3の西約3mに位置する。長さ約1.2m、幅約0.8mの卵円形の範囲に礫石と土器が集中している遺構である。掘り込みはなく、20cm前後の礫石が集中しているが、人為的な集石状況は看取できていない。集石の周囲には焼土も確認された。

遺物は総重量2,845gが出土し、遺構の規模に比して出土量が多い。16・17は土師器杯Aで、底部回転系切後無調整である。16は粗雑なつくりで内湾して立上がり、口縁で外反する器形である。18は土師器皿I-Aとみられるが、ロクロナデ調整を施すことや、口縁が開き、やや肩が張るということ以外不明なため時期の特定が困難である。遺構の時期については他の遺構では見られなかった土師器杯の出土により、少なくとも食膳具に土師器が使用されるようになる古代8期以降（9世紀後半～）であることは確実である。

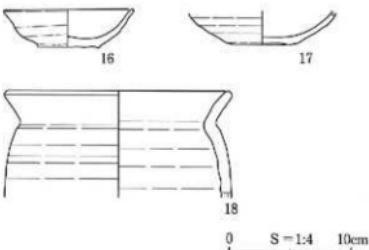


図14 SX1出土遺物

B区

調査区全体は礫石が多く露出している。南端で長さ約4m、幅約16cmの溝状の落ち込みが検出された。またピットの可能性のある掘込みが5ヶ所検出された。径約20～80cmの大きさがあり、調査区全体に炭化物・炭化材が散在する。焼失家屋とも考えられるが、焼土や炉・カマドも検出されていないため、その可能性は低いと考えられる。この調査区からの出土遺物は非常に少ない。

C区

狭小な調査区であるが、地山（VI層 黄褐色疊層）を掘り込む遺構4基を検出した。SK1は径約50cmの円形で深度17cm、SK2は径約40cmの円形で深度6cm、SK4は径約60cmの円形で深度32cmを有する。これらの3基はほぼ70cmの等間隔で北東から南西方向に並んで検出された。SK3は3基から北へ約1m離れたところに位置し、長径0.9m、短径0.6mの楕円形で深度18cmを測る。遺構内からの出土遺物はなく、覆土の堆積状況などの所見がないため、遺構の性格は不明である。なお、この調査区全体からも遺物は出土していない。

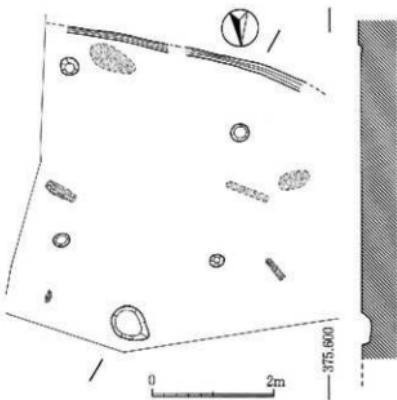


図15 B区遺構配置図

第IV章 結語

今回の発掘調査では、奈良・平安時代の遺構・遺物を検出した。検出した遺構は堅穴住居跡3軒とピット・土坑9基、性格不明の東石状遺構1基である。堅穴住居跡の主軸方向はSB1が東南-北西、SB3・5はほぼ北である。いずれもカマドの痕跡と構築材とみられる礫石を伴っている。

遺構は出土遺物の時期により、古代1～2期（7世紀末～8世紀前半）、古代4～6期（8世紀後半～9世紀前半）、古代8期（9世紀後半）以降の3時期に大別される。よってSB3→SB1・5→SX1の変遷が想定される。

遺跡の性格に関しては、出土遺物において煮炊具が非常に多く特殊遺物がみられないという傾向から、一般的な集落跡と考えられる。しかし善光寺平における当該期の集落規模から考えると、本遺跡も周辺に集落が展開していた可能性が高く、未だ集落の全容は解明されていないと推測される。今後の調査により古代の須坂に関する新知見が明らかになることを期待する。

引用・参考文献

- 泉森経1992『本郷大塚占墳』
上高井教育会2002『上高井の自然』
上高井誌編纂会1964『上高井誌（自然編）』
上高井誌編纂会1964『上高井誌（歴史編）』
桐原健1961「長野県須坂市園芸高校校庭出土の弥生式土器について」『信濃』Ⅲ13—8号
須坂市教育委員会1977『天神第1号墳確認調査報告書』
須坂市教育委員会1978『行人塚古墳』
須坂市史編纂委員会1981『須坂市史』
須坂市教育委員会1982『橋場遺跡』
須坂市教育委員会1989『坂田遺跡緊急発掘調査報告書』
須坂市2011『須坂市誌』第1巻自然編
仰長野県埋蔵文化財センター1997『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16—長野市内その4一篠ノ井遺跡群』
仰長野県埋蔵文化財センター2000『上信越自動車道坪上遺跡調査報告書28—更埴市内その7—更埴条里遺跡・星代遺跡群（含む大境遺跡・窟河原遺跡）』
鳥羽英雄2000『善光寺平南線の古墳時代前期～古代の土器編年』仰長野県埋蔵文化財センター『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28—更埴市内その7—更埴条里遺跡・星代遺跡群（含む大境遺跡・窟河原遺跡）一総論編一』

表1 遊物観察表

序号	種別	固有種名	出上位置	法 縦幅	法 横幅	法 高さ	法 底面	底 面	側 面	外 面	内 面	備 考	時期	
25	十断層	土壌	—	21.5	(6.3)	—	95	1.1mm厚/8	側面	側面	側面	側面	側面	8°C水~9°C雨
1	上断層	土-A	SB 1	カマツ	18.0	(10.6)	—	179	口縫~側面	側面	側面	側面	側面	8°C水~9°C雨
2	礁石	—	SB 1	カマツ	16.0	—	56	先端	側面	側面	側面	側面	側面	8°C水~9°C雨
3	礁石	杯A	SH 3	カマツ	14.0	3.8	10.0	62	1/3	側面	側面	側面	側面	8°C水~9°C雨
4	礁石	礁小C	SB 3	カマツ	15.0	(9.0)	—	89	1.1mm厚/16	側面	側面	側面	側面	8°C水~9°C雨
5	土礁石	小礁口	SD 3	カマツ	11.4	(6.2)	—	198	口縫~側面+半穿孔	側面	側面	側面	側面	7°C水~8°C雨
6	上断層	礁1-B	SB 3	礁L	22.2	(7.0)	—	121	口縫~1/4	側面	側面	側面	側面	8°C水~9°C雨
7	土礁石	礁B	SB 3	礁土	—	(7.2)	12.5	115	礁底	側面	側面	側面	側面	—
8	礁底礁	礁K	SH 3	礁土	10.3	11	602	体高下端~底部1/2	側面	側面	側面	側面	側面	7°C水~8°C雨
9	礁底礁	杯A	SB 5	礁土	13.4	3.6	6.0	36	3/16	側面	側面	側面	側面	8°C水~9°C雨
10	礁底礁	杯A	SB 5	礁土	13.0	3.6	7.0	54	1/5	側面	側面	側面	側面	8°C水~9°C雨
11	上断層	礁1-B	SB 5	礁L	24.8	(19.0)	—	1,071	口縫~側面斜1°	側面	側面	側面	側面	8°C水~9°C雨
12	土礁石	礁1-B	SB 5	礁土	19.4	(6.5)	—	38	1.1mm厚/8	側面	側面	側面	側面	8°C水~9°C雨
13	十断層	礁1-B	SB 5	礁土	20.8	(4.8)	—	37	1.1mm厚/16	側面	側面	側面	側面	8°C水~9°C雨
14	上断層	小礁D	SB 5	礁L	10.6	7.7	7.6	55	1/5	側面	側面	側面	側面	8°C水~9°C雨
15	上断層	小礁D	SB 5	小礁L	—	(3.0)	5.3	47	底面	側面	側面	側面	側面	8°C水~9°C雨
16	上断層	杯A	SX 1	礁L	10.6	3.2	5.0	56	2/3	側面	側面	側面	側面	10°C 晴
17	礁石	杯A	SX 1	礁土	(2.7)	4.6	63	体高下端~底部斜	側面	側面	側面	側面	側面	10°C 晴
18	十断層	礁1-A	SX 1	礁土	18.2	8.9	—	166	1.1mm厚/16	側面	側面	側面	側面	8°C水~9°C雨

脚注の「礁」・「土礁」・「礁底」・「礁石」・「礁底礁」・「礁底礁石」・「礁底礁土」は、現存地をわざる。
法線の（ ）は現存地をわざる。

図版 1

遺構個別写真(1)



SB1全景（西から）



SB3全景（南から）



SB3カマド（南から）



SB3カマド内土器出土状況（南から）



SB5全景（北から）



SB5カマド（北から）



SX1全景（南から）



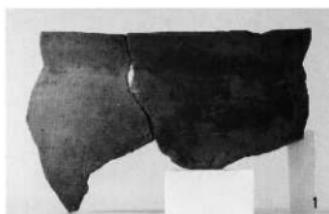
B区全景（北から）



C区土坑全景（南から）



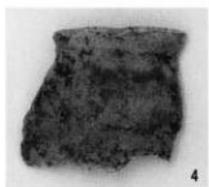
A区中央 (SB 3周辺) (東から)



SB 1出土遺物



3



4



5



7



6



8

SB 3出土遺物

図版 3



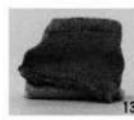
9



10



12



13

遺構個別写真(2)



11



14



15

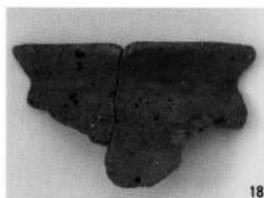
SB5 出土遺物



16



17



18

SX1 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たかはしいせき						
書名	高橋遺跡						
副書名	宅地造成工事に伴う発掘調査報告書						
シリーズ名							
編著者名	川中一穂・遠藤恵実子						
編集機関	須坂市市民共創部生涯学習スポーツ課						
所在地	〒382-8511 須坂市人字須坂1528番地1	TEL: 026-248-9027					
発行年月日	2012年3月30日						
ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査起因
高橋遺跡	須坂市 大字白滝1175-1	202070 他	36度 39分 34秒	138度 19分 14秒	2010.7.28 ~2010.8.11	733	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高橋遺跡	集落	奈良・平安	住居跡: 3 性格不明遺構: 1 ピット・土坑: 9	土師器・須恵器・軽石	
要約	本遺跡は松川扇状地上、八木沢川右岸に立地する集落遺跡である。宅地造成内の道路部分を中心に調査した結果、堅穴住居跡を中心とする遺構が検出された。住居跡の年代は7世紀末～8世紀前半が1軒、8世紀末～9世紀前半が2軒である。これらの住居跡にはカマド周辺に焼上跡や炭化物の集中域がみられ、カマド構築材に使用されたと思われる礫石を含む集石部も検出された。出土遺物は須恵器が少なく、烹炊具が多いという特徴も看取れる。				

高橋遺跡

発行日 平成24年3月30日
編集 須坂市市民共創部生涯学習スポーツ課
発行 須坂市教育委員会
印刷 信舟書籍印刷株式会社

